

東南アジア華僑調査旅行を終えて

船 越 昭 生

ま え が き

昭和39年12月22日より40年3月15日まで、華僑研究班は、日比野助教授（人文科学研究所）を中心に中村教授（天理大学）・藤原教授（京都女子大学）の参加を得て、約3カ月の調査旅行を行ない、筆者もまたこれに参加する機会を与えられた。

旅行はマレーシア滞在約50日間に重点を置き、そのほか台湾（約1週間）、香港（約1週間）、マカオ（2日間）、南ヴェトナム（3日間）、カンボジア（4日間）、タイ（約10日間）などにも及んだ。南ヴェトナムではサイゴンで宿舎を得られなかったため、ショロンに宿泊し、カンボジアではシエムレアップ付近へ、タイでは南部のソンコラ、パタニなどに小旅行を行ない、中国人の寺廟や墓地などを訪れた。

以下に記すところはその概要であり、調査対象・調査機関および各地の問題点と印象を要約した報告である。なお本稿の内容は昭和40年9月15日東南アジア研究センター研究例会において口頭で行なった報告に主としてとづくものである。

この期間、概して平穏無事に旅行することができたが、つぎに記す二つのケースで、ちょっぴり旅の苦渋を味わわされた。そのひとつはサイゴンにおける宿舎探しの一件である。われわれは、サイゴンへの出発に当り、数日前からヴェトナム航空代理店のフランス航空の事務所へ宿舎の依頼をしていたのだが、サイゴン空港到着後、予約不能のメッセージが届けられた。やむをえず、同航空のバスでサイゴン市内の営業所へ行き、そこから、電話帳に記載されている限りのサイゴンおよびショロンの旅館・ホテルに額に汗を滲ませながら2時間余り、問合わせの電話をかけつづけたのである。その間、誤って米屋や菓子屋へ電話のはいった苦笑の数幕もあったが、満員またはアメリカ人専用を理由として、ことごとく断られたのであった。そこで、通りがかりのタクシーを拾って、とにかくショロンへ向い、福建出身の運転手に小さな旅館を探せ

と命じて、数軒に当たった末、やっと戒厳令下の外出制限時間ぎりぎりに、中国人の経営する小旅館へ冷汗三斗の思いで飛込むことができた。電話すらもたない旅館であったことはいうまでもない。

他のひとつは、二度目のタイからマレーシアへの入国に際して、マレーシア鉄道のストライキにぶつかったことである。南タイの田舎町滞在中の数日間、新聞をみなかったわけではないが、なにぶん外国の事件なので、タイではほとんど問題とはなっていなかったわけである。対インドネシア戦費増大に伴う増税反対のためのストライキなのである。タイ鉄道で国境の駅について、はじめて、タイの出入国検査官から連絡すべきマレーシア鉄道の列車のないことを知らされ、荷物を担いで国境の鉄橋を渡り、入国時間に遅刻したのだが、特別のはからいで入国させて貰ったのである。そして、暗闇のなかをタクシーと渡し舟を乗りつぎながら励し合ってコタバルへ入ったのは夜も10時を過ぎた頃であった。

ずいぶん心細い思いをしたのだったが、いずれも事宜を得た処置で事なきを得たのは、まさに幸運というべきであろう。

なお、旅行中一行の健康は概して良好だったが、各人とも二、三回程度、軽い日射病・風邪・下痢に見舞われた。3月2日、南タイのヤラ駅プラットフォームで、列車待ちの徒然に貨物秤に上ったところ全員10%以上の減量で、年長者ほどその程度が甚しかった。

調 査 対 象

台湾で訪れた研究機関は中央研究院（近代史研究所・歴史語言研究所・民族研究所）・国立台湾大学（附属図書館・史学系図書室・考古人類学資料室）・台湾省立図書館・同新店分館、台中の故宮博物院管理处で、それぞれ資料蒐集につとめた。また本調査の重要な対象としていた寺廟では、台北の龍山寺・孔子廟、彰化の孔子廟・天后廟や刈入れ跡の田圃に設けられた天師壇の祭など、新竹では孔子廟・竹蓮寺・城隍廟・

長和宮・東寧宮・関帝廟・鄭氏家廟その他の宗祠を参観・調査した。なお、台中よりの帰途新竹郊外桃園台地の客族出身者家庭を訪問し、多大の収穫があった。

香港では、研究機関としては、香港大学 University of Hong Kong (馮平山図書館・博物館)・香港中文大学新亞書院(図書館・東南アジア資料室)・同大学崇基学院(図書館・遠東学術研究所・歴史及地理系)などを訪問して調査を行ない、その他新しい仏教復興運動の結果つくりあげられた多くの仏寺・仏教学院・仏教クラブなどをも見学した。

マカオでは、政庁・図書館・同図書館何東分館・博物館・孫文紀念館を訪問し、媽祖廟・古天后廟・観音堂・天主堂・城砦などを視察した。

ついでサイゴンの国立図書館・中華総商会・同会図書館・福建会館など、プノンペンの国立博物館・福建・広東会館を訪問し、とくにサイゴンの中華総商会ではかなりの資料が得られた。バンコクでは国立図書館・国立博物館・中華総商会・Siam Societyなどを訪れた。

主目的のマレーシアにおける調査対象は次の如くである。クアラルンプールではマラヤ大学、国立文書館、国立博物館、広東・福建義山、仙四師爺宮およびセランゴール仏教会支部を訪問した。(写真1参照)

またベントンへの移動に際し、「新村 New Village」といわれる第二次大戦後の特殊な村落成立事情と構造をもつ武吉丁宜新村、玻璃新村を見学、またカロック

ではマレー人と中国人の神性の混合神と目される新建立の拿督廟に詣で、さらに近接のヒンズー寺院では香花・聖水の祝福をうけた。クアラピラは街路広闊、整然とした小さな町であるが、ここでは観音廟および孫文ゆかりの図南薬行などを視察し、この町の都市計画の基礎をつくったイギリス駐在官の頌徳碑をも調査した。

マラッカは幾度くりかえして調査しても尽きぬ興味豊かなところである。例えば南洋華僑の開拓した歴史の古い町にしばしば見られる、かつての中国人自治体の統領“甲必丹”の位牌を祀る観音廟の青雲亭(甲必丹のオフィスがあった)があり、中国人墓地や寺廟を管理している。われわれ一行は青雲亭及びその管理下にある三宝亭(鄭和を祀る)、またブキットチナにある中国人墓地の“甲必丹墓”などで碑文・墓碑を拓した。この墓地には明らかに“皇明壬戌”と刻まれる明代の墓もあり、崇禎年間のものと目される。また現在南洋華僑社会で著しい仏教の現代化運動をみるべく、“香林覚苑”(仏教団体)の経営する初級学校“香林学校”を訪問したが、整頓された学校の雰囲気は教育内容をもしのばせるものがあった。また図書館・博物館などを視察し、Survey Departmentでは地図その他の資料を蒐集した。2月2日は陰暦(現地および中国では農曆という)大晦日の行事を見るため、雑踏を極める青雲亭を訪れ、爆竹のなかを同安金厦会館に赴いて京劇の清唱を聞いた。

また翌陰暦元旦には現地で“峇峇”と通称されている、数代前よりマレーに定住する華僑の正月行事に接すべく、マラッカの代表的な有力者の家庭を訪問した。中国語は失われても家庭内に残る中国風の儀礼の強固な伝統の残存を眼のあたりに見ることができた。2月4日は回暦正月だったので、マレー人最上層家庭の一つを訪問、歓を交えたが、これはわれわれがマレー人と親しく接した唯一の例であった。

シンガポールにおける調査の中心は国立図書館東南アジア資料室であった。当地の有力者で厦門大学出身の陳育崧氏が、その所蔵の“椰蔭館”

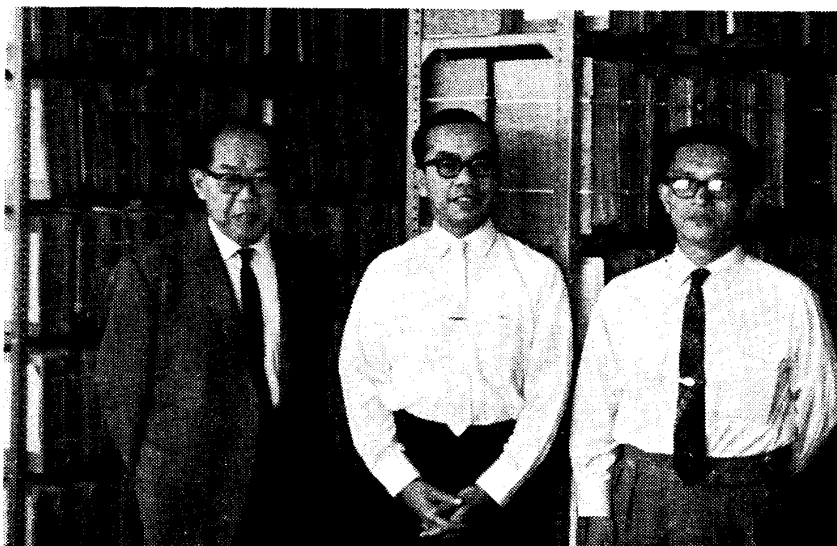


写真1 クアラルンプールの国立文書館にて
(中央は同館次長アルヴィ・ジャンタン氏)

蔵書を挙げて寄附したものである。われわれ一行が寄附後最初の外国人閲覧者だということで歓迎された。また、シンガポール大学や南洋華僑の総力を結集して

が存することだった。

南洋華僑勢力のなかでも最有力の結集中心であり、また我国とも未解決の懸案をもつシンガポール中華総

商会との接触には日比野助教授・中村教授が当り、意見の交換・資料の蒐集などかなりの成果を得ることができた。また当地有力新聞“南洋商報”の資料室、潮州会館、古い伝統を有する福建華僑のクラブ“吾廬俱樂部”を訪問し、また海峡植民地最初の華僑学校“萃英書院”，天福宮，天后廟などの碑拓作業を行なった。イポーにおいては若干の会館・寺廟のほか孫文を援助した故鄭民偉氏の令息を訪問，タイピンでは国立博物館分館を訪問，その資料，図書の蒐集をみて，原始マレーの研究に努力した Evans, I. H. N など英国人研究者の業績を偲んだ。

ペナンにおいては同族の“みたま

や”たる“宗祠”と“甲必丹”の墓地を調査した。宗祠では福建の邱氏・曹氏の竜山堂をはじめ，文山堂・潁川堂・陳氏宗祠・鄭氏家廟などを訪れ，“甲必丹”辜氏の初代より5代までの墓を確認し，碑拓を行なった。また寺廟では太伯宮・広福宮などの調査を行ない，とくに前者では乾隆年間の石香爐を認めて拓本をつくった。（写真4，5参照）

南タイのソンコラやパタニでは福建華僑の天后廟・林姑娘廟などを訪れ，タイ人の仏教，華僑の仏教，マレー人の回数などの混在する社会の複雑さを視察した。なお，この方面の華僑は福建系のものが多く，かつペナンとの交流が頻繁なことが知られた。

各地の問題点と印象

台湾の景観を基礎づける淡紅色の土壌の鮮かな色彩は，この地域が自然地理的な意味において，東南アジアと同一の類型に属することをはっきりと示していた。この土地は実質的には明末以後の開発にかかり鄭成功入台以後とくに中国人の移住が活潑になったのである。したがって，現在においてもなお，中国人移住民のもつ社会生活のパターンを極めて色濃く示しているようである。たとえば，宗祠・家廟や故郷の土地の

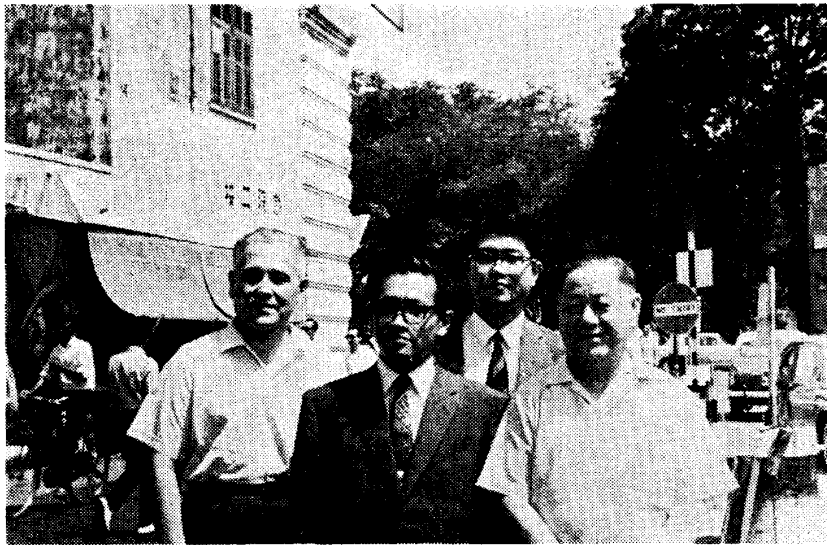


写真2 シンガポールの学者たちと，向って右は陳育崧氏
左はシンガポール大学賀光中教授

1956年に開校された華僑の文化中心南洋大学，潮州会館と関係深いカレッジ義安学院などをも訪問，各機関の研究者と連繫を密にした。（写真2参照）

さらに，マレー研究において，植民地時代から多くのすぐれた業績をはぐくんだ“Journal of the Malayan Branch Royal Asiatic Society”の刊行で有名な同会を，副会長許雲樵教授（義安学院）の案内によって訪れ，多くの研究資料を蒐集することができた。（写真3参照）この機関は，国立図書館（旧ラッフルズ図書館）の北東に隣

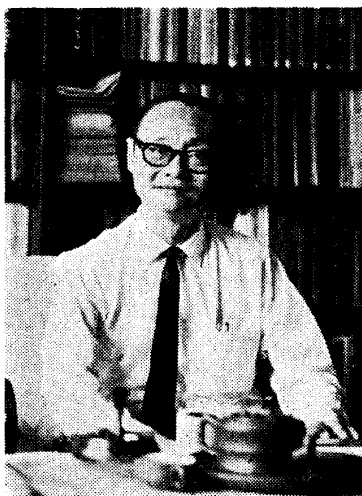


写真3 書斎の許雲樵氏教授

接する国立博物館（旧ラッフルズ博物館）の一室に置かれており，併せて博物館の列品をも視察した。注目すべきは南洋遺留の中国陶瓷が陳列されており，鄭和以降明清のものが多数を占めるなかで宋代青瓷の逸品



写真4 ペナン竜山堂邱氏宗議所において宗譜を調査中の一行



写真5 ペナンの甲必丹だった鄭氏の邸宅と家廟、鄭氏関係の遺物は多くペナン博物館に収められている

神々、職業の神々、家族制度など南洋華僑社会に類似のものをもっている。そして、彼等を送り出した旧中国の社会の側面をも併せ有しているのである。しかも明治末から大正にかけて行なわれた台湾旧慣調査その他の数多くの純学術的な資料や研究成果も残されており、またわが国の研究者による植民地統治下の台湾についての批判的研究も存している。資料の継続性において、すくなくとも過去半世紀以上を遡ることができるからである。台湾は、南洋華僑社会研究の具体的な方式をつくり出すのに好適のフィールドと考える所以

である。

香港の繁栄は聞きしに勝るものがあった。人によっては戦前をはるかにしのぐともいう。しかも、官庁・警察・大学などの政庁と一般市民の接点には中国系の人々を配置しており、中国人もここでは大した違和感なしにのびのびと生活できるわけである。これが Crown Colony, Hong Kong であることを忘れさせるほどである。しかしまた、華人の社会にも拘わらず、標準中国語の通じないことも驚くべきものがある。小学校には英語・華語による二つの型があり、この場合の華語とは標準中国語でなく広州語であるという。また日常の放送・テレビなどにも広州語が多く用いられている。

大陸においては標準語化の勢の滔滔と進んでいる現在、もう数10年もすれば香港は特殊言語の孤島と化するであろう。九竜半島の仏教学院で会った、福建からやってきた少女のきれいな標準語を想うにつけても、香港における中国語の問題は将来重要なテーマとなることが予測される。香港には南洋華僑の故郷華南地方のあらゆる華語が行なわれ、これら南方華語の修得には極めて便利な場所である。しかも、大陸への唯一の門戸であり、さらに南洋各地との密接な人的つながり、経済的つながりも存在する。そのうえ、中国人学者ばかりでなく、世界各地の学者の往来も頻繁であることは、今後の華僑研究の有力な一中心となるであろう。すでにこの状況に即応して研究施設も若干活動を始めていることが知られるのである。

昨今におけるインドシナ半島・タイの華僑問題はなんとなく重苦しい雰囲気を感じられ、香港などとは打って変わった重圧感をうけるのである。インドシナ半島などはすでに紀元1世紀より華人の植民の行なわれた地域で、史料に現われる華僑の最古の定着植民の事実

があり、したがって、これら地域の原住民の血にはかなりな中国的要素が混じていると思われ、他の東南アジア地域と異り原住民に商業的聚落形成の能力が認められる。また、激しい政治的独立への欲求もある。その結果、学校教育における華人の標準中国語教育の制限は事実、華僑の標準中国語の力を極めて弱いものに行っているのである。ある意味において、南洋華僑における新客と“峇峇”の対立に類する事象がこの地域の社会において認められるのは、或いはかえって濃厚な華人の血が原住民に混じているせいかも知れない。

マレー半島に広く分布する赤色土壌はこの半島の顕著な景観構成の要素である。これを以って古い中国文献に見える“赤土国”をこの半島の一部に比定する論者もあるほどである。この赤色土壌は、基盤の石灰岩がばい乱・酸化した土壌の堆積したもので、高い気温と多量の降水を示すメルクマールである。3月初旬、東海岸に入って始めて雨季に遭遇した。これまで全旅程を通じて無用の長物化していた洋傘をここではじめて開いた。雨季とはいえ日本の梅雨と異なっており、スコールの頻度が多くなるのである。ほとんど毎日数時間のスコールに見舞われた。

半島を旅行して気付いたのは東西・南北の対比であった。ごく大ざっぱに言えば、南から北に行くにつれてゴム園が減少し、その管理がわるくなり、それにかわって、水田の緑が鮮やかさを増す。それとともに次第に華人よりマレー人の姿が目につくようになることだった。また東西の対比では西海岸が人口稠密で華人が多く、また錫の採掘があちこちで進んでいるのに比べ、東岸は人口稀薄で大きな川の河口に商業的聚落を中心とした小都市が立地する程度で、一般にマレー人が多く、また漁村もしばしば目についた。マレー人についてとくに気になったことは、ケランタン、ことにコタバル周辺のマレー人が服装もきれいで顔にも気品が窺われることであった。華僑問題ではないが、マレー研究の一課題ともなるであろう。

マレーシアの半島部を旅行して、この国が一般にいわゆる「ゴムと錫の国」であることを改めて感覚的に知ったのだが、実はこの両者共華僑の努力によって、よく今日の盛大をなすに至ったものである。錫鉱山・ゴム園の分布と、華人の分布を地図化してみれば、その分布状況が対応関係を示すことは一目瞭然である。

マレーの錫ははやく9世紀頃から知られており、14世紀の汪大淵撰「島夷誌略」や、15世紀はじめに鄭和に随って南洋に下海した馬歡の「瀛涯勝覧」などにもみえるところであり、16世紀以降マラッカに拠ったポルトガルやオランダの貿易ももっぱら錫を対象としたものであったといつてよい。マレー土侯のおもな経済的基礎も、錫の生産やこれに対する徴税であったのである。18世紀末から、19世紀前半にかけて、華人の錫業への進出は著しく、これを繞って酋長の徴税権争奪に端を発したセラングール内戦(1866~1873)は華人首領葉亜来(アライ)の努力によって終熄せしめられ、その過程で現在のクアラルンプールの町が成立し、華人の進出を一層容易にし、この地方の錫鉱業の中心地となったのである。ペラ州のLarut地区では1862年に錫工として移居した華人は2万5千といわれ、1872年には4万に増加していた。その盛況が推測されるのである。その中核となったのが、客族より成る海山公司与粵族よりなる義興公司以、1862年鉱区争いに端を発した流血の械闘が約10年間つづき、ついに英国軍隊の介入によって和睦し、現在のタイピン(華語「太平」に由来する)の町ができたといわれている。現在の中心集落と錫鉱、錫鉱と華人の因縁もまた浅からざるものがあるわけである。マレー華人に根ざす「開拓者意識」もあるいはこの辺に出たものかも知れない。1930年代に新しい技術が導入されるまで、中国人経営の鉱山産出の錫が大部分を占めていたことも周知の事実である。

ゴムにおいても、19世紀末、シンガポール植物園における移植の成功にもかかわらず、その企業化をためらっていた英人実業家に先んじて、シンガポールの林文慶博士やマラッカの実業家陳齊賢等の手によって、いち早く大規模な企業として、はじめて着手せられたもので、マレーシアゴム産業においても華人の貢献はきわめて大なるものがあるといわねばならない。

よく知られるように、マレー半島のゴムは1875年、Wikham, K. が、ブラジルより7万粒の種子をひそかに英国にもたらし、これをロンドンのKew植物園に試植したのにはじまる。この種子は10%の再生をみ、うち、200本の樹苗がセイロンに移されたが、約1%が移植に成功したにすぎなかった。このころ、英本国とセイロンから20数本の樹苗が海峡植民地にもたらされ、1877年、シンガポール植物園で、またこれと前後してマラッカ、クアラカンサルなどでも移植に成功し

た。これが今日、マレーシアはじめ、インドネシア・タイ・ヴェトナム・セイロンなどの数百万本に及ぶゴム樹の租先である。

この後、1888年、シンガポール植物園長として来任した Ridley, H. N. の貢献によって、植物学上ならびに農学上からみて、ゴム産業の企業化の成功の見通しが得られたのである。Ridley にすすめられた林文慶はシンガポールに聯華樹膠公司をつくって、4,000 エーカーのゴム園をつくり、同時にマラッカの陳齊賢にすすめて、20万元の投資で、2,000 エーカーのゴム園の経営に着手せしめた。のち、陳氏のゴム園は英人に200 万円で売却され、10 倍の利を得たことから、マレー華人社会でゴム栽培に手を出すものが急激に増加するようになったといわれている。

なお、現在栽培されているゴム樹のおもな品種は(1) P.R.I.M. 501, 503, (2) Prang Besar 86, (3) Glenshil, (4) Pilmor 84, (5) T.J. No. 1 などである。これらの創出には、1926年、当時蘭領インドより後れていたゴム生産を振興すべく、クアラルンプール郊外に建設された Rubber Research Institute の貢献がきわめて大であった。

一般にゴム樹は植樹後、7 年にして、ゴム液の採取が可能となり、20 年をこえると老化し、30 年にして完全に駄目になるという。第2 次大戦後20 年、戦中、および戦後の復興期に植えられたゴム樹は、もはや老朽化を辿りつつあるのである。旅行中、至る処で、ゴム林の焼却や植替え作業が行なわれていたのはこの為であろう。一方において、世界的には合成ゴムの進出が顕著となり、しかもゴム園の老朽化は急テンポで進みつつある。マレーシアゴム産業の前途には楽観を許さぬものがあり、政府も、年間の植替え目標を作って、補助金を出し、ゴム産業の再建に必死となっている姿が、ひしひしと感じられたのである。

しかし、一方において、主食作物はじめ果物などを多量に外国に依存しており、ゴムと水稲以外に農業といえるものをもたない現実の事態を考えると、単一栽培方式から幾分農政の重点を食糧作物に移した方がよいのではなかろうか。

主食は全消費量の半分をタイ国など近隣の米産諸国から輸入し、果物では潮州産で、香港経由輸入される“唐山の名果”が幅を利かせ、田舎のバス停留所の傍ですら、イスラエルやオーストラリア産の果物の並べ

られている現状は、はたしてマレーシア連邦にとって好ましいものだろうか。

豊かな自然に対する高度の農業技術的改善、たとえば季節的な偏倚の著しい降水調節のための貯水や灌漑機構の整備、環境や施設の進歩に対応する新品種の創出など、なおなすべきことは多い様である。これに関連して、シンガポールやジョホールにおける華人のバインアップル栽培の成功は農業の現況から考えて注目に値するもののようである。

以上みてきたように、ゴムと錫はマレーシア連邦にとって、また華僑にとってきわめて大きな産業であり重要な財源といえるのである。この点、ほとんど精米や米の流通を主とするタイ・ビルマ・ヴェトナムなどのあり方とは若干傾向を異にするとともに、かえって、マレーシア華僑の米の輸入や雑貨の仲介と密接な補完関係をもつことになる。世界の文明国とゴムと錫を媒介として交渉をもつとともに、東南アジアの華僑圏とも食糧輸入と雑貨供給によって深くつながっているのである。この点、局地的な流通の支配だけでなく、広域的な活動分野の大きいマレーシア華僑の国際性は注目すべきであろう。

他方、国内的には半数に近い人口を有する華僑は、二重国籍の認められている現況において、かなりな政治的発言権を保有しており、馬華公会などの政治結社は現政権においても重要ポストを確保しているのである。この点も、また原住民による民族主義的傾向の強い東南アジア諸国とことなるところであろう。そして、これがマレーシア華人社会における標準中国語の広汎な通用とも関連していると思われる。

東南アジア華僑社会に共通してみられる血縁的団結・同郷による団結・言語別集団の職業分化に加うるに、如上のマレーシア華僑の特質も看過しえないところである。

さらにもう一つつけ加えておきたいことに、マレーシア華僑内部の地域的対立の底流の存することがある。香港あたりの中国人によるとシンガポール人口の90%は華人であるという。統計上では80%をやや上廻る程度なのだが、彼らははっきり90%と言っている。絶対多数である。我々の旅行はシンガポールの分離独立以前だったが、このシンガポールの華人たちが「連邦」という名称で呼ぶとき、きまってジョホール水道を隔てた彼方を指し、けっしてシンガポールを含まし

めることはなかった。

ともにマレーシア連邦に所属しながら、共属の意識はほとんど感でられなかったのである。

そこにはまたマレーシア連邦のマレー第一主義という華人にとっては我慢ならぬ政策への反撥もたしかにあったであろう。シンガポール政界の裏話としてよく知られることだが、華僑が選挙に勝つためにはどうしても中国語による演説を行なう必要があり、中国語を失った“峇峇”の場合、代表的な有力者であっても、選挙のためには中国語を学習して選挙に望むのだという。これはマレーシア連邦の華僑要人の英語・マレー語中心の文化の型に比し、明らかにシンガポールの全体的雰囲気異なることを示すものと思う。

先祖伝来の遺産に安住し、英国系の教育を受け、この土地のみを自らの国土と観じるゆたかな“峇峇”実力者達と、数々の圧迫と困難の体験もなお記憶に新しく、漢民族の光栄と伝統を信頼して中国文化を保持しようとする華人とが、同じく中国人の血を引きながら対立するのは当然であった。シンガポール華僑で、比較的進歩派と目されるキリスト教徒間ですら、なお、閩・越の言語で書かれた福音書が通行し、かつ教会も華南方言で行うサービスや日曜学校に、それぞれ方言別にわけて時間割を組んでいる。

開明的な華人ですら、こんな状況であり、伝統的な自分達の文化への執着はかなり根強いものがある。一昨年夏より数次にわたってシンガポールで起った華僑とマレー人の衝突事件も、あるいはこの点からも説明できるかも知れない。

加えてインドネシア対決政策のあふりを受け、インドネシア貿易の犠牲を余儀なくされた上、国税負担の増額を要求されたとき、これに極めて強い反撥を感じるのは自然の成り行きだったに違いない。

反面、分離独立の有力な原因となった中国銀行閉鎖問題にみられるような、大陸への著しい傾きも、貿易上の問題とも絡んで、理解し得るのである。恐らく香港の全事象から、英国支配という要素を除き去った自由港というのが、シンガポールの理想像となるであろう。どちらにも行けない中国人、どちらにも満足できない中国人の好んで集るところとなるであろう。まさに華僑の国というべきであろう。90%の人口を占めるという事実はここでは圧倒的な重みをもつのである。

いま、東南アジア各国における華僑人口の割合をみ

ると、旧仏・蘭領と比較して旧英領においてとくに著しいことが指摘される。旧英領海峡植民地・マレーにおける英国人の植民の歴史は、まさに中国人を導入してこれに十分な活動の余地を与え、これを高所から把握して大局を誤らなかった英国人の統治能力の卓絶した手腕の歴史である。香港においてもみたように、生き生きと活動する華人の背後には、チャータード・バンクや香港・上海銀行などを機関としてコントロールする英国の経済政策があったのである。

われわれは、この度の調査において、おもに華人植民の歴史に関する調査研究を行ったのであったが、これらの資料が集まるにつれて、研究が深まるにつれて、しばしば英国植民地政策との接点にたどりつくのである。これらの点を考えるとき、華僑研究のもう一つの側面として、英国植民地経済史からみた華僑研究を充実させねばならないことを痛感するのである。

それは、ひとつには、華僑社会の構造のなかに、英国の植民地支配に対応する姿勢が看取されるからであり、また、地上最優秀の民族と自負し、伝統文化に対する限りない自信をいだく華人と、自尊心と能力において、決して華人に劣らず、祖国への信頼と忠誠心に溢れた大英帝国の臣民との接触の歴史だからでもある。

生活の寸描

つぎに、旅行中眼に触れた華僑生活の一端を記しておこう。まず服装からはじめよう。男子の場合、よほど保守的な人は別として、ほとんどわが国の夏季と同様だが、ただ土地の人はズボンにベルトを用いず、両サイドをファスナーで締めて、ベルトの部分のみに汗の滲むのを避けている。したがって、ベルトの有無で、土地の人か否かを凡そ判断しうるわけである。また学校通いの生徒たちの服装は清潔で、男子生徒は白開襟シャツにショートパンツが一般化している。婦人の服装は、政府機関や銀行などに勤務するものは別として、七分そでのブラウスにスラックスという中国の夏季の服装が多く、労働着の場合、スラックスは黒色がよく用いられていた。また若い娘たちは好んで、螺鈿で飾られた枇杷形の縁の眼鏡をかけ、少しおめかしするとこれにネックレス、イヤリングが加わる。そして多くの場合、サンダル履きなのである。街頭にみる広告看板も専らこの服装が描かれることはいうまでも

ない。

つぎに食生活をみると、旅行中、バンコック滞在中を除いて、一貫して華人旅館を利用し、中華料理で通してきた。われわれの健康状態が比較的良好であった一因は、生水を絶対に飲用しない華人社会のなかにあったこととともに、中華料理で通したことにもある様で、熱帯における中華料理の利点を改めて体験的に認識した次第である。また、これらの食物を通じた体験から、華僑の食物と日本の若干の食物に著しい類似の存することを知ったのである。“ういろう”や蒸し菓子類、^①“いば”・麵類・刺身の類、朱泥の陶器を用いて行なう福建出身者特有のわが煎茶の法のプロトタイプとみられる飲茶の風習などのたぐいがこれである。

また、街頭にでて、連なる漢字看板のなかに、各地に共通して数多く目についたのは“皮鞋(皮靴)”の看板であり、これには何か日本と異なる事情の存することを予測せしめるものがあつた。その第一は畳を用いない、むしろ西洋風に近い床をもつ家屋構造と、それにとともに就寝時を除いて片時も靴を離さぬ生活慣習に基くもので、外出時のみに靴を使用する日本人の生活とは比較にならぬ靴への依存度の高さを示すものと思われた。ついでながら、彼等の靴に対する感覚が日本人と著しく異なっており、たとえば灰皿やマスコットなどのモチーフにして、卓上や飾り棚に置き、全く不浄感を有たないのにも驚いた。靴はむしろ生活に密着した愛すべきものとしての要素を彼等の社会では有つのであろう。

さきに記した正月行事は具体的には家庭の正庁に祀られる先祖の位牌への礼拝であり、ひとびとは父母の在ます一族の中心となる家庭に集ってくる。実際この習慣は比較的忠実に行われており、要職の人も寸暇を割いて先祖の前に跪拝し、老いた親たちを見舞い、兄弟姉妹と久闊を叙するわけである。有力者の場合、日常交渉の頻繁な人人が年賀に集って饗食するわが国同様の風景もみられぬこともない。

個々の家族はさらに同族のより大きな団体に抱摂され、この同族団体が基盤となって、出身地による地縁団体をつくる。この地縁団体は更に大きな福建・広州・潮州・客族・海南など、より広範囲な出身地グループに統べられることになる。これら広域地縁団体のメ

ンバーは、出身地によって、はっきり言語・職業分野・取引銀行などを異にするわけである。これらの頂点に立つのが中華総商会である。われわれの滞在中、同会の理事改選が行われたが、その選出は、同業組合と、出身地別グループの2本立てとなっていた。しかし、出身地によって職業分野が分かれているわけだから、結局はこれら出身地グループから選出されてくる理事によって運営されているといつて過言ではない。まったく見事なピラミッドというほかはない。秘密結社から殆んどあらゆる事業の分野にわたって、その構造を支えたのはこの家族制度に発する仕組だったわけである。

華僑の社会生活における顕著な祖先崇拜・宗族結合・地縁的団結・擬制家族制などとともに、日常生活のなかには我々の生活文化と基礎構造において共通する面が見出される反面、目をみはらせる異質性もまた共存しているのである。華僑社会の歴史的社会的研究はこれらの点においても興味深い問題の数々を豊富にふくんでいるのである。

む す び

もしも東南アジア地域に、華人の進出・定住が全く行われなかったと仮定するならば、われわれは一体いかなる東南アジア像を描き出すことができようか。この地域の自然や文化の錯雑した姿にただ手をこまねいてその構成に困惑するにちがいない。ことほど左様に現実の東南アジアにおいては華僑の果す役割は不可欠のものとなっている。社会のあらゆる結節点をおさえて、これを総合的に組織化した華人の広汎なひろがりや深い滲透力、これこそ、モンスーンや稲作などにも決して劣ることのない東南アジアの地域的性格を形成する重要な要素にほかならないのである。実際、華僑を抜きにした東南アジアなど、全くイメージが浮んでこないのがむしろ当然なのである。

われわれは、約3ヵ月という短い期間の旅を行っただけであり、限られた体験にもとづいた知識にすぎないわけであるが、華僑こそ東南アジア社会の実質的な担い手であることを再認識するとともに、そこに至る過程に発揮された華人のすぐれた資質を改めて確認した次第である。